

部活動における体罰問題と向き合う —今後の日本スポーツ界と指導者の成長に向けて—

19191012 伊東拓真

筆者は高校生の部活動で、監督からのパワハラ、監督自身の価値観や根性論を用いた古い価値観の押しつけを経験し、萎縮したままプレーをしていた。これらをきっかけに本論文では、まず体罰問題の現状を明らかにする。次に体罰が起きる原因を明らかにし、過去に起きた部活動での体罰事件や、顧問教員が抱える問題などの調査、筆者によるアンケート調査を基に、これまでの選手が求める指導者像と、指導者が置かれている状況を明らかにし、中学生・高校生に対する今後のスポーツ指導のあるべき姿を検討し、現代における好ましいスポーツ指導者像を提案する。先行研究では、現代の選手と指導者の間にコミュニケーションの取り方や文化の違いや、顧問教員の多忙さなどが指摘されている。実際に筆者は過去の良かった指導者の特徴、選手と接するときに注意していることなどに関する調査を行った。

日本で部活動での体罰問題が取り上げられた時期や、件数を調査するため、朝日新聞クロスサーチを用い、1985年から2022年までの新聞記事を5年ごとに整理した。その結果、2010年から2014年までに取り上げられた記事が全体の55%を占めており、最も多い結果となった。原因として、大阪市立桜宮高校体罰自殺事件が考えられた。この事件は、メディアによって大きく報道され、世間に体罰の恐ろしさを知らせるきっかけとなり、体罰発生件数が減少した。しかし、一層体罰による被害者を減らすためには、ガイドラインの修正や、各学校への調査など、常に運動部の情報を管理すべきだと筆者は考える。

アンケート調査から、選手は指導者に対して、高い指導力を求めており、理不尽な態度や言動、指導に対して不満に感じていることなどが分かった。一方で、指導者はスポーツを通じた人間形成とスポーツを楽しむことを最も重要視しており、短所より長所を伸ばす指導を心がけているなど、選手と指導者の本音を知ることができた。

先行研究やアンケート調査から、現在部活動で起きている問題や実態を知ったうえで、筆者の考える現代における好ましいスポーツ指導者像は、時代の変化に敏感であり、柔軟に対応できる指導者であると結論づけた。また、部活動の顧問教員の多忙さをサポートするために外部指導員の導入を行うべきだと考えた。今後、日本スポーツの発展を期待するためには、人間形成や競技者としての成長が著しい中学生・高校生を担当する指導者が成長することが最善である。